埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Cultural Identity Formation of "Intercultural Children" with Japanese Ancestry : Analysis of Case

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-08-21
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 鈴木, 一代
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/964

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

日系国際児の文化的アイデンティティ形成
― 事例の検討 ―

Cultural Identity Formation of “Intercultural Children” with Japanese Ancestry: Analysis of Case

鈴　木　一　代

SUZUKI, Kazuyo

The purpose of this study is to clarify the cultural identity formation in “Intercultural children” with similar backgrounds, by analyzing and comparing the cases in detail. The subjects are two teenager girls who have Japanese fathers and German mothers and who visit the German international school in Japan. Repeated interviews have been conducted. In both cases, the subjects qualified as having formed “identities as international children,” but their dominant cultures were different. Futhermore, certain facets like: 1) the Geman mothers’ attitudes towards the Japanese language and culture; 2) the intenational school which offers a “moratorium” for cultural identity; and 3) the bilingual and bicultural environment from the subjects’ infancy are important for cultural identity formation of “intercultural children”. Moreover, it is suggested that the “case study method” has been very useful for clarifying cultural identity formation of “intercultural children”.

問　題

近年、日系国際児[1)]、すなわち、両親のどちらか一方が日本人、他方が外国人の子どもの増加が著しい。日本国内の日系国際児の出生数は、調査が開始された1987年には、10,022人で出生総数の0.74％に過ぎなかったが、2000年には、約1.9％（22,337人）に到達した[2)]。その後も、出生総数に占める日系国際児の割合は1.9％前後を維持しており、出生児の53人に１人が日系国際児という時代を迎えている。他方、日本人国際結婚者（配偶者が外国人）の増加も著しい。日本で、法的に国際結婚が認められたのは、1873年（明治６年）の太政官布告第103号（内外民婚姻条規）によってであるが、その後、130年を経た2003年には、国際結婚者の数は36,039人となり、国内の全婚姻件数の約4.9％（20組に１組）を占めるまでになった[3)]。国際化とともに、今後、日本人国際結婚者の増加が予想されるが、それに伴い、日系国際児のさらなる増加も推測される。

国際児は、常に複数の文化が存在する多文化環境（二つ以上の文化・言語が存在する家庭環境、家庭内と家庭外では異なる文化・言語環境、頻繁な文化間移動、など）のなかで

キーワード：文化的アイデンティティ形成、日系国際児、事例研究、日本、ドイツ
Key words ：cultural identity formation, intercultural children with Japanese ancestry, case study, Japan, Germany

生育する。このような国際児にとって、言語習得、文化習得、（文化的）アイデンティティ形成は極めて重要な課題である。これらの課題については、心理学、教育学、言語学、社会学、文化人類学などの領域において、少しずつ取り上げられるようになってはいるが（例：新田、1992；野入、2000；鈴木、1996；高橋、2002）、日系国際児の増加が、比較的最近の社会現象であるため、研究の蓄積は十分とは言えない。特に、日系国際児の文化的アイデンティティ形成を中心に取り上げた研究は極めて少ない（例：Murphy-Shigematsu,S., 1997；鈴木、2004a、2004b）。

文化的アイデンティティは、一般的には、自分自身がある文化に所属している感覚である。国際児は、生まれたときから、二つの文化（母親の文化と父親の文化）と向き合いながら成長していく。このような国際児にとって、「国際児としてのアイデンティティ」、すなわち、二つの文化（国）（例：日本人と米国人）を混合したアイデンティティを形成できることが最も自然であると考えられる。また、国際児がそのようなアイデンティティを形成するためには、二つの言語力と二つの文化の知識を習得していること、そして、国際児を肯定的に受け入れる環境が存在していることが不可欠であることが指摘されている（マァ-フイ重松、2002；鈴木、2004a）。

ところで、日系国際児の文化的アイデンティティ形成に関する研究の問題点を整理・検討した鈴木（2004b）は、研究を難しくしている原因の一つとして、国際児が多様であることをあげ、それ故に、研究方法には工夫が必要であると述べている。また、日系国際児の多様性を生み出す主な条件として、「生まれながらに規定される条件（自己選択が不可能なもの）」、「生後規定される条件（成長とともに自己選択可能なもの）」、そして、「その他の一般的条件」（年齢、性別など）をあげている。「生まれながらに規定される条件」は、親の国籍の組み合わせ、日本人の親が父親か母親か、国際児の外見（生物学的要因）、国際児の出生地であり、「生後規定される条件」は、国際児の居住地、家庭環境（特に、父母の関係、経済状態）、学校環境、などである。そして、多様な国際児の文化的アイデンティティ形成を明確にしていくためには、質的な研究方法、とりわけ、事例研究の有用性を強調している。

本稿では、日本の国際学校に在籍する青年期の日系国際児を対象に、言語習得と文化習得を中心に、事例の詳細な分析、および比較検討をおこなうことによって、日系国際児の文化的アイデンティティ形成について考察するとともに、事例研究の可能性について検討したい。

方　法

①調査協力者：日本（首都圏）在住で、D国際学校（ドイツ系国際学校、以下D校）に在籍している日系国際児（女子）２人（詳細については、各事例参照）。面接開始時は14歳、終了時は16歳。なお、事例の提示に際しては、匿名性保持のため、本質に影響のない範囲で内容を一部変更している。

②調査期日・場所：19XX年春～19XX+１秋（約１年半）。予備面接１回を含む５から７回の面接調査。

③調査方法：非構造的面接。A校を通じて、本人および、保護者の了解を得た上で、予備面接をおこない、本人の承諾を改めて得る。予備面接や１回目の面接ではよい人間関係をつ

くることに重点を置き、２回目以降、だんだんと時間を掛けて、文化的アイデンティティとの関連で、国際児ということをどのように受けとめ、感じているかを中心に面接を進めていく（必要に応じて、悩みの相談等にも応じる）。面接の内容は、生育歴や生育環境、学校生活、友人関係、家庭環境や家族、言葉、文化、ドイツ・ドイツ人と日本・日本人の違いなどについてである。面接時の使用言語は、日本語およびドイツ語。面接の一部は、協力者の承諾を得た上で、テープレコーダを使用し録音する。また、面接時に得られた以外の資料（手紙等）も参考にする。

❹結果の整理・分析：各回ごとに、録音を起こしたものと筆記したものを基に、時間の流れに沿って、基礎資料を作成する。次に、内容をカテゴリーごと（例：生育歴）に整理し、言語・文化習得を中心に、質的な分析をおこなう。

結果と考察

「生育歴と生育環境の概略」、「家庭、学校、言語などの現在（面接時）の状況」、「ドイツ・ドイツ人と日本・日本人について感じていること」、「国際児としての意識（国際児であることについての意識）」、「将来について（将来への思い）」に分類し、事例ごとに面接結果を提示するとともに、若干の考察を加える。なお、協力者の語りは『』、面接者の発話は（S：）で示した。また、国際児の言語・文化や母親の態度に関して特徴的な箇所は、それぞれ下線を引いたり□で囲んだ。

○事例Ｔ

• 日本生まれ。日本国籍。父親は、日本国籍（50代）、専門職、ドイツ語が堪能。母はドイツ国籍（40代）、主婦、日本語が堪能。第２子（兄、妹）。外見は国際児的外見。

• 19XX年春～19XX+１秋（約１年半）の間に、５回（予備面接１回を含む）面接を実施。各回２～３時間。主に日本語、一部ドイツ語を使用。面接場所は喫茶店。

＜生育歴および生育環境の概略＞

日本で生まれ、約２歳の時、ドイツに移動する。その後、日本に帰国し、近所の幼稚園に入園する。当時、ドイツ語はまったくできなかった。母親は日本語が堪能で、ほとんど日本語を話していた。（「日本の学校へいかせるつもりで、ドイツ語は必要がないと親が考えていたためではないか」と回想）。幼稚園の途中でまたドイツへ移動する（４歳）。初めは、ドイツ語がまったくできなかったので、日本語を話したが、自分の言いたいことが相手に伝わらなかった記憶がある。

Vorschule（小学校入学前の教育施設）に行くと（１年間）、ドイツ語が少しできるようになった。いじめっ子がいて、よくいじめられた。このドイツ滞在のショック（環境の違いや言葉が理解できなかったことへのショック）から、その後、Ｔの性格が暗くなったと父親が言っている（Ｔ自身は、明るい方ではないかもしれないが普通と思っている）。

５歳で小学校に入り（通常より１年早い）、土曜日には、日本語補習授業校に通う。小学校ではドイツ語ができなくて困ったことはほとんどなかった。２年生の途中までドイツに滞在し、日本に帰国し（６歳）、D校（２年生）へ編入する（D校に入ることについては、両親が決めていたかもしれない）。

小さな頃は、学校に行けばドイツ人の友達がいて、家に帰れば、近所の日本人の友達がいた。５年生から、漢字は家庭教師に習っている（１週間に一度）。約２年おきにドイツを訪問（２か月半ぐらい滞在）していたが、最近の３～４年は行っていない。

考察：日本で生まれ、乳児期に一度ドイツに滞在しているが、その後、日本の幼稚園に

入園し、再度、４歳でドイツに行き、Vorschuleに入るまで、日本語だけで育ち、ドイツ語を積極的に使用することはなかった。文化の違いや日本語が通じないことに対するショックはドイツ滞在の否定的な記憶として残っている。しかし、小学校に入ってからは、ドイツ語で困ったことはない。平行して、日本語も学習している（日本語補習校に通学）。帰国後は、Ｄ校に編入する。Ｔは、幼少時、日本文化・言語が強い環境で育ったようだが、小学校に入学するころからは、両言語、両文化が存在しており、両言語・文化の習得が可能な環境で育ったと言える（ドイツ滞在中の日本語補習授業校への通学、帰国後は、ドイツ人と日本人の友達の存在、日本語の補習、定期的なドイツ訪問）。

＜現在（面接時）の状況＞

家庭：雰囲気には日本的な厳しさはない。友達の親と比較すると親は少し甘い。母親は友達のような感じだが、父親は堅い方（例：芸能人になることは不許可）。母親は比較的日本的な感じで生活している（『みんなでドイツに住むとしたら、想像もつかない。お母さんがいろいろ大変じゃないかと思う。』）。

学校：D校に通学していることに満足している（楽しい、友達に会える）。勉強はあまり面白くない。成績はあまりよくない（自己評価）。

言語：両言語を使用できる。どちらかというと日本語の方がいい。一日のなかでも、ドイツ語より日本語を話すことが多い。日本語については、新聞はだいたいわかるが、書くことや単語の知識が不足している。学校ではドイツ語で考えるし、ドイツ語の方が読みやすい。数を数える時はドイツ語の方が早くできる。両言語をもっと学びたい（『両言語のどちらかを忘れることはないと思う。純粋な日本人だったらそうかもしれないけど。きょうだいとか友達とのコンタクトがあるから。』）。家庭では両言語を使用している。母親との会話では、Ｔが日本語で話し掛け、母がドイツ語で答える。兄妹との会話では両言語を使うが、話す内容によって異なる（学校に関する事柄については、ドイツ語）。

友人：どちらかというと日本語のできる人と気が合う。友達ともだいたい日本語で話す（休み時間など）。ドイツ語を使用していても日本語を混ぜて話したい（『ドイツ語と日本語を混ぜて使うのは日本語にあってもドイツ語に無い言葉があるから。ドイツ語だけだと通じない。うまく訳せない。ドイツの友達に手紙を書いてもこの日本語の言葉を使いたいと思う。』）。

考察：ドイツ人の母親は日本志向であることがわかる（日本語も堪能）。家族全員が両言語を話せる。家庭では、両言語を用いているが、相手や話題によって使用言語が異なる。学校でも、日本語のできる友達と日本語で会話をする。全体的には、日本語が多い。学校の言語（学習言語）がドイツ語のため、読み書きに関してはドイツ語が優勢だが、話言葉は日本語が優勢のようだ。

＜ドイツ・ドイツ人と日本・日本人＞

数年間ドイツに行っていないので、ドイツのことは知らない。日頃会っているドイツ人は日本の影響を受けているので、ドイツのことはあまり知らない。遊びに行くのと、住むのとでは違うが、ドイツ（ドイツ人）の雰囲気は覚えている。日本についてもあまり知識はないが、どちらかというと知っている（ラジオ、テレビ、学校の友達、雑誌などを通じて）。

ドイツ人は思っていることをはきりと言うし、きつい人が多い（Ｔ自身ははっきりと言わない）。日本人は、あまり大胆なことをしないし、Zurückhaltend（控えめ）。日本の方がドイツよりも好き。ドイツやドイツ人は強いて言えば、好きより嫌い。ドイツ人でも、日本に長く住んでいるか、日本語が少しできる人はいいが、日本語がまったくわからないと打ち解けにくい。朝は、御飯で味噌汁。住むのは、日本がいい。

考察：ドイツについての知識と比較すると日本の方をより知っている。ドイツ人が物事をはっきり言うのに対し、日本人が控えめなことを肯定的に評価している。全体的に、Tが日本志向であることがわかる（日本が好き、日本語ができる人がいい、など）。

＜国際児としての意識＞

①『ハーフだといろいろある。（略）珍しがられる。（略）外国人と思われたりする。アメリカ人と間違えられるのがいや。自分で日本人だと思っても、周りが思ってくれない。やっぱり外国人扱いされたりする。（略）（みんなが）いつも「ハーフ」とか聞く。「日本人ですよ」というと「エーッ」とか。』

②『やっぱりハーフって難しいですね。ドイツにいても、日本にいても、外人と言われるし。ドイツにいても中国人とか言われる。（略）ハーフの女の子ということを、まわりの人はかっこいいなと思うかもしれないけれど、いろいろハーフの苦労とかむずかしいの。』

③『やっぱり中途半端なんじゃないのかな。ドイツ人からも日本人からも外国人っていうことになる。（S：自分で外国人だと思う？）ドイツに行ったら思うけど、日本では思わない。（略）。ハーフだと（外人とは）やっぱりちがうんじゃない。どちらかというといい感じに違う。』

④『D校のなかでは、ハーフということは気にならない。他にたくさんハーフがいるから。』

⑤『今のままがいいと思う。』

⑥『（ハーフで）よかったこともないことはないのだけれども、考えてみると…平凡じゃないから。別に目立ちたいとかそういうのではないけど、みんなと違うとか……（略）昔、純日本人に見られたいと思ったこともある。昔、小さい頃、近所で遊ぶと、外人とか言われたたことあるけど。そう言われるとなんかいやだった。ハーフで、自分では普通だと思っているので、別に得したとか、思っていない。自分では、普通だと。そんなに変っているわけではないから。純ドイツ人と比べるとハーフの方が親近感というか親しみがある。そこら辺にいる日本人とハーフだったらやっぱりハーフ。学校（にいる人）だったら別に同じ。ドイツ人でも日本語がわかればそれでいいし。』

⑦『２か国語話せるのが（ハーフの）いい点。』

⑧『どちらかというと日本人じゃないかな。周囲の人が日本人ばかりだから、どっちかっていうと、日本人の考え方の方が合う、ドイツ人より。母親は一応ドイツ人だけれど、何か違う。日本の影響というか、日本に合わせているっていうか、何かやっぱり違う。たまには、日本人はこうだからいやだとか言うんだけれど。』

⑨『（S：ドイツと日本という２つのHeimat（故郷）があることをどう思う？）えっ、ドイツをHeimatとは思わない。』

⑩『やっぱり中途半端じゃない。日本語もあんまり簡単にはできないし、というか、普通の日本人より、不利なところあるじゃない、少し。ドイツ語も完璧にはできないから、中途半端だからよくないと思う。やっぱり、ハーフって、他の子（ドイツ人）と比べて、ドイツ語の単語というか、わからないのがある。（略）本を読んでいてもね。（略）やっぱりハーフってみんなそうなんじゃないかな。ドイツに住んでいたらドイツ語はいいけど……日本に住んでいても学校では日本語使わないから。（S：日本にいて、日本の学校にいっていたら、違っていた？）そうしたら、もう完全に日本人っていう感じだったんじゃないのかな。（略）（S：中途半端だと思う？）言葉ぐらいじゃない。』

考察：①②③④からは、T自身が「日本人」と思っても周囲がそれを認めてくれないジレンマや、両国で外国人扱いされることの難しさを感じていることがわかる。しかし、たくさんの国際児がいるD校では国際児としての自分の存在が気にならないことにも言及している。⑤⑥⑦からは、国際児としての自分を受け入れていること、同じ国際児には親近感があることやドイツ人でも日本語を話せる人

に親しみをもてることがわかる。⑧⑨では、ドイツ人よりも日本人の考え方が合うこと、母親はドイツ人だが、日本人の考え方や日本の生活に合わせているところがあることについて言及している。また、ドイツを故郷とは思わないと答えているところから、全体的に、日本志向であることがわかる。⑩からは、日本に居住していても国際学校に通学しているので、両言語（特に、単語）について、ネイティブと比べると完璧ではない（中途半端）と感じていることが理解できる。

総合すると、Ｔは、国際児であることを、難しいとか中半端と思うこともあるが（例：日本人だと思っても、周囲が認めてくれず、外国人扱いされるし、言語も完璧ではない）、平凡ではない（みんなと違う）ので、今のままがいいと肯定的に受けとめている。特に、国際学校では、国際児は自然に受け入れられている。両言語とも、ネイティブほど完璧ではない（中途半端）と感じていることとから、言葉がどの程度できるかということが国際児とってとても大きな事柄であり、（文化的）アイデンティティの基礎になることが示唆される。国際児を特別な存在とは思っていない。どちらかというと日本人的（日本志向）。

＜将来について＞

①『ドイツに行く気はない。ずっとドイツに住んでいなくてはならない。長い間ドイツで我慢できるかなと思って。なんか切り替えなくてはならないじゃない。ドイツ語とかドイツ。なんとなく日本語恋しいというか、いろいろドイツにないものもあるでしょ。食べ物とか・・・』

②『結婚するとしたら、どっちかというと日本人がいいと思う。やっぱり日本語が通じたい。自分の思っていることが伝わるように。ドイツ語でもいいけど、どっちかっていうと日本語できた方が、何かと便利、何かといい。別にハーフでもいいんだけど。とにかく日本語がわかればね。（略）今のところ、日本にこだわっちゃうの。』

③『国籍を選ぶとしたら、日本。』

④『（S：日本にずっと住みたい？）今はまだわからない。』

⑤『平凡ってあまりすきじゃないんだな…どこでもいるような子、誰でもやっているって好きじゃない。やっぱり変ったことしたいけど。よくわからないけど。まだ具体的にはわからない。』

考察：①②③からは、国籍を含め、日本、日本語、日本人にこだわっていることがわかる。ドイツに行きたくはないようだが、③④で述べているように、進路や職業など将来のことについてはまだ具体的に考えていない（その後の情報では、日本の大学に進学）。

＜事例Ｔのまとめ＞

①国際児であることを、難しいとか中途半端と思うこともあるが、平凡ではなく、みんなと違うので、肯定的に受けとめている。②小学校ぐらいから、二文化・二言語的な環境があった。ドイツ語は学校で、日本語は近所の子との遊びや補習で習得している。家庭では両言語を使用している（小さいころは日本語を使っていた）。③日本生まれだが、幼児期から小学校２年生までの間に、２回、ドイツに滞在したことがある。また、定期的にドイツを訪問している。④ドイツ人の母親は日本語が堪能で、また、日本風の生活をしている（ドイツ人であることを前面に出していない）。⑤ドイツ語と日本語の両言語を使用できるが、自己評価では、日本語の方が得意。しかし、読み書きについては、ドイツ語優位。話す言語で思考している。⑥日本志向（日本・日本語・日本人への愛着）。⑦将来のことは未定だが、日本にこだわっている。⑧国際学校

に通学していることを肯定的に評価している。国際児は自然に受け入れられている。学校でも、友達と話すときには、日本語を使う。

○事例Y

• 日本生れ。ドイツ国籍。父親は日本国籍（60代）、専門職、ドイツ語可能。母親はドイツ国籍（40代）で主婦、日本語ははやや可能。第２子（兄、弟）。国際児的外見。

• 19XX年春～19XX+１秋（約１年半）の間に、７回（予備面接１回を含む）面接を実施、各回１時間20分～３時間50分。主に日本語、一部ドイツ語を使用。面接場所は喫茶店。

＜生育歴および生育環境の概略＞

日本で生まれる。３歳から日本の幼稚園（近所）に行く（２年半）。父親や近所の子ともと日本語を話していたので日本語はできた。外国人だからと仲間はずれにされた（『自分は外人とは思っていなかった。』）。先生からも嫌われた。幼稚園については嫌な感じがある。時々間違いをした（例：午前中だけの日にお弁当を持っていく）。人よりバカだから違うとか、目立つと思い、気にしていた。

父親はYを日本の学校に入学させたかったが、その前の半年間だけという限定で、D校へドイツ語の勉強のために行かせた。そのままD校に在籍したいと思っていたところ、それが実現した（母親の決定）。ドイツ語が急に上達した。半年後には日本語と同じぐらいになる。D校に入ってからは日本語を使わなくなる。おとなしく勉強ができるので羨ましがられ、嫌味を言われたり、いじめられた。約２年ごとにドイツへ行っている。

考察：Yは、日本で生まれ、小さな時は、日本語中心の生活をしていた。D校（小学校）へ入学後、ドイツ語が上達し、日本語よりも優位になっていくが、日本語を使う機会は減少していく。２年ごとにドイツを訪問しているので、ドイツについての知識もそれなりに持っている。小さいころから、いじめの対象になりやすかったようだが、Yのおとなしい性格とも関係があるように思われる。外国人のため差別された経験があるので日本の幼稚園に対しては、よい印象はない。母親が外国人の場合は、日本語力の不足や生活習慣を知らないことから、日本の幼稚園や学校からの連絡内容を正確に理解することが難しく、その結果として、子どもが周囲とは異なる存在になってしまうこともある。

＜現在の状況＞

家庭：家族の雰囲気は普通で、子どもらしくしていていい。リラックスしている。あまり何も言われないが、両親とも成績がいいと喜ぶ。家族で散歩を時々する。Yは家にいることが多い。以前は、父親はドイツ語、母親は日本語を話そうとしていたが、最近はドイツ語。父親は（子どもに）日本語を忘れて欲しくないので、日曜日には日本語を話すことに決めていたが、母が日本語を話すことできなくて中止になった。母親は、どちらかというと典型的なドイツ人だが、普通ではない（エネルギーがある）。ドイツ系国際学校に行っているからドイツ人らしくなるし、母親はドイツ人だから気が合う。母親の友達はドイツ人ばかりなので、ドイツ語だけになっている。父は普通の（典型的な）日本人とはだいぶ違う（雰囲気が違う）。母親の影響の方を多く受けている。

言語：日本語よりドイツ語の方が上手だが（ドイツ語がうまくなると日本語を忘れていく）、ドイツ人に比べると弱い（自己評価）。家庭教師に日本語を習う。家の中で、日本語を話すのは、父親とだけ。学校では日本語は使わない。以前は教会の日曜学校が日本語だったが、最近、ピアノの先生以外とは、日本語を話すことがない。日本人と一緒だと日本人らしくなる（礼儀正しい、丁寧）。日本人や日本語をできる人とは日本語の方がいい。ドイツ人と話す時はドイツ語を使う。

日本語で話すときは、日本語、ドイツ語で話すときは、ドイツ語で考える。英語を使うときは、ドイツ語で考えて英語にする。

学校：勉強や言葉では困ったことはないが、学校が少し怖い。授業中はいいが、休み時間は嫌い。

友人：友達や人間関係ではいつも困っている。仲良くなるとドイツに帰ってしまう人が多いので親しい友達がいない。やや孤立している。クラブ活動などをやっている割には友人がいない。人と親しくなるのが下手（気軽に話しかけられない、話すのがうまくない、みんなといてもしゃべることがない、相手にされない）。知り合いは、ドイツ人のみ。男の子が少し怖い（からかわれる）。

考察：家庭では、ドイツ人である母親の影響が強い。両言語ができるが、ドイツ語が優位（自己評価では、ネイティブより劣る）。日本語の補習を受けていること（日本語の家庭教師）から、ドイツ系国際学校に在籍していても、日本語習得にも力を入れていることがわかるが、日本語を話す機会は少ない（父親、ピアノ教師）。学校では日本語を使うことはない。学校の勉強やドイツ語では問題はないが、まじめで、おとなしい性格のせいか、友人関係や人間関係を築くのが難しいようだ。

＜ドイツ・ドイツ人と日本・日本人＞

①『日本人とドイツ人の違いは礼儀正しさ（Höflichkeit）。どちらかというとドイツ人的。ゆくり考えて話したり、一つ一つ着実にやるタイプ。』

②『日本の方が安全だし、日本人の方がやさしい感じがする。ドイツ人は大声。』

③『日本人でも、日本だけにいる人と外国に住んだことのある人とはだいぶ違う。ドイツにいた日本人はすごくドイツらしい。』

④『お父さんが日本人でも日本人と一緒にいる時はいつも外人にされていた。ドイツでは一人ドイツ人がいるとドイツ人になる（両親の一方がドイツ人ならドイツ人になる）。ドイツの方が気持ちがいい。』

考察：日本人とドイツ人の違いをある程度把握している（①～④）。どちらかというとドイツ人的と自己評価しているし（①）、ドイツに対して肯定的な気持ちをもっている（④）。

＜国際児としての意識＞

①『ドイツ語を話すとドイツ人のような感じになる。日本語を話す時は半分って感じ。ドイツ人はどうせいろいろ混じっているから、ドイツ人のようになるのは簡単。』

②『お父さんに似ている。でもお母さんの方が近い感じ。たくさん話せる。お母さんはドイツ人の方がわかりやすいと言う。直接物事を言うから。すごくしっかりしている。』

③『お父さんが日本人でお母さんがドイツ人で得している。まったく違うアジアとヨーロッパがいっしょになっているから。ただの人間になれる。私見てれば、ドイツ人だからとか日本人だからと言えなくなる。日独は仲がいいから問題ない（戦争をした国だと問題）。』

④『ハーフの方が普通の人より頭がいいと思う。だいたい２つの言葉話せるし。学校では（ハーフということで）特別に見られることはない。』

⑤『日本の社会のなかにハーフとしての自分を特に生せる場所はないと思う。あってもそれは他の人にもできること。ドイツの方が簡単（に生かせる）。ドイツ人にとって日本語はむずかしいと思うから。私が特別なのは、小さい時から日本語できるとか、日本の生活を知っているとか、日本と関係のあることだから。（日本語を）仕事として使うことには、今、興味ない。もっと日本語、上手でなければならない。日本語の本読むの疲れる。英語の方が早い。日本語、今、使い慣れてない。大きくなるにつれて、私の中の日本がなくなってしまう感じがする。だんだんドイツ人になっていく。本当のドイツ人みたいではなく、自分の考えの中にはまだ日本人が残っているけどだんだん弱くなる。３年経って、

ドイツ語だけで勉強して、日本語使わないと（日本語が）すぐできなくなると思う。２年前の方が日本語上手だった。残念だと思うけど仕方がない。一つ選ばなくてはならない。日本のものがだんだんなくなると言うのは、もしかしたら私だけの問題でなく、日本人全体を見てそう感じたと思う。日本人もだんだん日本人でなくなるという感じがする。変わっていくのは残念だけどいやではない。』

⑥『両親が絶対に思っていないのは、ドイツ人か日本人かを中心に考えること。お母さんは初めからいつもドイツしかなかったので、お母さんといっしょだと日本の方は消えていた。（中略）ドイツに住むと日本語は忘れるかもしれないけれど、日本にいてもドイツ語は忘れない。こころのなかではドイツの部分が大きいし、日本には友人がいないことがその理由。ドイツ的になる方が簡単。』

⑦『幼稚園のころは外人ということを気にしていた。今は、外人が増えたので珍しくなくなった。ドイツ人の知り合いしかいない。ドイツ人の方が簡単。言葉と関係がある。日本語忘れてしまうことが怖い。日本が関係なくなる。外国みたいになる。今のところは日本は祖国みたい。祖国が２つあるというか。もし日本語忘れれば日本を分からなくなる。』

考察：①では、使用言語によって、自分が変化することに言及している。すなわち、ドイツ語を話すとドイツ人だが、日本語を話すとハーフ（国際児）と感じる。②からは、母親からの影響が強い（親近感、肯定的評価）ことが推察できる。③④においては、日独国際児であることを肯定的に評価している（頭がいい、二言語を使用できる）。学校では国際児は特別な存在でないこともわかる。⑤では、言語と文化的アイデンティティについて語っている。日本語を使う機会が少なくなってきていること、日本語の力が不十分なことから、日本がなくなり、ドイツ人になっていくように感じている。日本の部分を持っているドイツ人だが、日本の部分がだんだん弱くなっている。それを残念に思いながら、ドイツ語、ドイツが優勢になっていくことを選んでいる。⑥では、日本とドイツ両方が存在している状態を肯定しているが、ドイツ人の母親といるときは、日本は存在しなかったこと、こころのなかでドイツの部分が大きく、ドイツ語を忘れることはないことを述べている。母親の影響の大きさが示唆される。⑦では、小さいころと比較すると、現在は、国際児も珍しくなくなり過ごしやすくなってきていることがわかる。今は、日本とドイツという二つ祖国があるが、日本語を忘れ、日本とは関係がなくなることを危惧している。

総合すると、Ｙは、国際児であることを肯定的にとらえている。ドイツ人の母親の影響が強く、両言語・文化を理解しながらも、成長するにつれ、だんだんとドイツ語が優勢になり、それとともに、こころのなかでドイツが優勢になってきている。現在、日本語を使用する機会が少なくなり、自分のなかの日本の部分が侵食されていくように感じている。言葉ができることが、文化的アイデンティティの感覚に重要であることが示唆される。

＜将来について＞

①『国籍はどうでもいい。どちらも選ぶことができるが、紙に書いてあるもので人の心とは関係ない。でも外からみれば選んだということで少しは引き摺られると思う。それほど大きいものではない。』

②『Ｄ学校を卒業したらドイツの大学に行くことになっている。』。

考察：国籍はあまり重要でないと考えていること、Ｄ校卒業後の進路はきめていることがわかる。（その後の情報によると、Ｙはド

イツの大学に在籍している）

＜事例Ｙのまとめ＞

①国際児であることを肯定的に受けとめている。②小さなころは、二文化・二言語を学習しやすい環境にいたが（ドイツ語は学校で、日本語は父親との会話や、近所の子との遊びや補習で習得）、高学年になるにつれ、日本語を使用する機会が少なくなり、ドイツ語が中心になる（学校へ行くまでは、日本語が中心だった）。③日本生まれで、ずっと日本で生活している。定期的にドイツを訪問している。④ドイツ人の母親は、日本語が十分ではなく、家庭でもドイツ語を使用し、ドイツの友人が多く、ドイツ人として留まっており、ドイツ志向。母親の影響を強く受けている。⑤ドイツ語と日本語の両言語を使用できるが、ドイツ語の方が優位（自己評価）。しかし、ネイティブに比べると劣る。思考言語もドイツ語が優位。⑥ドイツ志向（ドイツ・ドイツ人に対する肯定的感情）。しかし、日本語を忘れ、日本と関係がなくなり、こころのなかから日本が消失してしまうことに対しては恐れをいただいている。どちからというとドイツ人的（自己評価）。⑦将来は、ドイツの大学に行き（実際に、ドイツの大学に入学）、ドイツを生活の場とすることも視野に入れている。⑧国際学校に通学していることを肯定的に評価している（特別視されない）。学校では、友達と日本語を使うことはない。

全体的考察

まず初めに、２事例を比較検討することにより、二人の日系国際児に共通した属性（条件）と異なるものを整理する。その後で、文化的アイデンティティ形成について考察する。

１．日系国際児の属性（条件）：事例Ｔと事例Ｙの場合

鈴木（2004）による「日系国際児の多様性を生み出す主な条件」に従って、２つの事例の属性（条件）を整理すると表１のようになる。

表１：事例Ｔと事例Ｙの属性（条件）比較

事　例	T	Y
①組み合わせ	**日本・ドイツ**	**日本・ドイツ**
②日本人の親	**父**	**父**
③外見	**国際児風**	**国際児風**
④出生地	**日本**	**日本**
⑤居住地	**日本**→ドイツ→日本→ドイツ→**日本**(→日本)*	**日本**(→ドイツ)*
⑥家庭	**５人家族**、**第２子**、**中流**、など	**５人家族**、**第２子**、**中流**、など
⑦学校	**日本幼稚園**→ドイツ現地小→**Ｄ校**（2年から）→日本の大学	**日本幼稚園**→**Ｄ校**→ドイツの大学
⑧年齢	**14歳～16歳****	**14歳～16歳**
⑨性別	**女子**	**女子**

備考：＊括弧内は高校卒業後の居住地 ＊＊追跡調査実施（23歳）
ゴシック＝共通な事柄

①については、両者とも、日本とドイツの組み合わせである。経済力、言語の優位性、過去および現在の両国の関係性からみて、この二国の組み合わせの親をもつ国際児は、日本社会のなかで比較的肯定的に評価される可能性が高い。つまり、これらの国際児は問題の少ない受け入れ環境にいると考えられる。②については、両者とも父親が日本人である。したがって、日本国籍を選択することが可能であるが[4)]、実際には、Ｔは日本国籍、Ｙはドイツ国籍である（Ｔは将来も日本国籍を維持する意向、Ｙは国籍にはこだわっていない）。また、一般的に、一日の中で多くの時間を子どもと過ごす母親、すなわちドイツ人母親の影響力が強いことが推察される。③については、２人とも国際児的風貌であり、外見的に

は日本人とは異なる特徴ももつ。日本で出生し（④）、現在（面接時）、日本在住である（⑤）ことから、 鈴木・藤原（1994）や鈴木・片寄（1997）が指摘しているように、出生地である日本へのこだわりや居住地である日本の影響を受けていることが考えられる。ただし、Ｔは、小さいころドイツに住んでいたことがあり、小学校の低学年から日本に居住している。両事例の両親は将来も日本に滞在することが予想されるが、ＴやＹの将来の居住地はまだ明確でない。⑥については、両者とも、５人家族で３人きょうだいの第２子である。社会経済的地位（中流）は共通しているが、相違点もある。たとえば、家庭での使用言語である。Ｔの家庭では、両言語を使用するが、Ｙの場合はドイツ語が優位である。⑦の学校については、日本の幼稚園とD校は共通しているが、Ｔはドイツに滞在し、Vorschuleと現地小学校に通学したことがある。なお、年齢や性別は、両者とも同じである。

ゴシックで示された両事例に共通する属性（条件）は、①親の国籍の組み合わせ、②日本人の親、③外見、④出生地、⑧年齢、⑨性別である。両事例間でやや異なる属性（条件）は、⑤居住地、⑥家庭、⑦学校である。そのうち、面接時の居住地が日本であること（⑤）、５人家族の第２子であり、社会経済状態が中流であること（⑥）、および日本の幼稚園に通学した経験があることと現在Ｄ校に在籍していること（⑦）は共通である。家庭（⑥）については、使用言語、きょうだいの性別などの細かい点、学校（⑦）に関しては、Ｔは小さいときにドイツ滞在やドイツの学校に在籍した経験があるが、卒業後は日本に留まり、日本の大学に進学したのに対し、ＹはＤ校を卒業するまで日本にいたが、卒業後、ドイツに行き、ドイツの大学に入学していることが異なる。

したがって、ＴとＹの国際児としての属性（条件）の主要なものは共通していると言える。特に、「生まれながらに規定される条件」および「一般的条件」は一致している。すなわち、両事例とも、日本人の父親とドイツ人の母親をもつ女子で、日本で生まれ、国際児的外見をもつ。日本の幼稚園に通学した経験があり、面接時においては、14から16歳で、日本に居住しており、国際学校D校に在籍し、家庭の社会・経済的地位が中流であることも共通している（ＴもＹも定期的にドイツを訪問している点でも共通）。

２．日系国際児の文化的アイデンティティ形成

日系国際児が、国際児として自然であると考えられる「国際児としてのアイデンティティ」を形成していくためには、二つの言語力と文化の知識を習得していることと国際児を受け入れる環境が必要不可欠である。面接結果からは、両事例とも両言語および両文化の知識をある程度習得していることが明確になった。しかしながら、事例Ｔと事例Ｙの両言語力、両文化の知識のバランス、および志向性に注目すると表２のようになり、違いが見られた。

表２：言語能力、文化の知識および志向性

事　例	T	Y
言語－全体	**日本語**＞ドイツ語	日本語＜**ドイツ語**
－会話	**日本語**＞ドイツ語	日本語＜**ドイツ語**
－読書	日本語＜**ドイツ語**	日本語＜**ドイツ語**
文化の知識	**日本**＞ドイツ	日本＜**ドイツ**
志向性	**日本**＞ドイツ	日本＜**ドイツ**

備考：１）ゴシックは優位なもの
　　２）卒業後の進路：Ｔは日本の大学、Ｙはドイツの大学

言語については、Ｔは、読み書きはドイツ語が優位だが、会話は日本語中心であり、言語全体としては、日本語が優勢で日本語に愛着を感じている。それに対して、Ｙは、言語全体、会話、読書きともすべてドイツ語が優位である。文化の知識についても、Ｔは日本が優位なのに対して、Ｙはドイツが優位である。さらに、両文化・国への志向性も、Ｔは日本に向いているが、Ｙはドイツに志向性がある。

また、受け入れ環境に関しては、日本の社会のなかで、外見等から特別に見られることがあっても、日独両国の関係が良好であることや国際学校に在籍している（例：多くの国際児が在籍しており特別な存在ではない）ことから、両事例とも日系国際児として比較的受け入れられやすい環境にいると考えられる。また、すでに明らかなように、両言語および両文化の知識もある程度習得しているので、したがって、両事例は、「国際児としてのアイデンティティ」を形成しやすい国際児と考えられるが、両言語･文化のバランス（優位性）は異なる。「国際児としてのアイデンティティ」と両文化（言語）のバランスを図示したものが、図１および図２である。

図１は、国際児（Ｘ）が、「文化１」と「文化２」の二つの文化をどの程度習得しているか（志向しているか、愛着を感じているか）を示している。ここでの「文化」は、言語を基盤として習得された文化的知識の総体であり、愛着や志向性も含む。AとDを結ぶ対角線上にいる国際児（Ｘ）が、Ａに向かって上昇していくにつれ、「文化２」が多くなり、「文化１」が少なくなる。それに対して、国際児（Ｘ）の位置が、Ｄに向かって下降して行くにつれ、「文化１」が多くなり、「文化２」が少なくなる。国際児（Ｘ）が、ＡとＤの対角線の真中付近にいれば、「国際児としてのアイデンティティ」を形成しやすいが、AおよびDに近づくと、どちらか一方の文化的アイデンティティを形成する可能性が強くなることが推察される。しかしながら、両文化の割合がどの程度ならば、「国際児としてのアイデンティティ」を形成することができるかは今後明らかにすべき課題である。なお、対角線上の真中（付近）に位置すれば、「国際児としてのアイデンティティ」を形成しやすいばかりでなく、両文化のバランスもいい国際児ということになる。

図１：国際児と文化的アイデンティティ

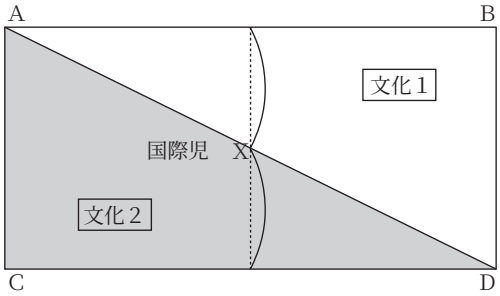
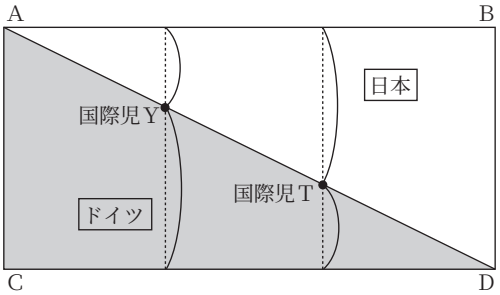


図１に、事例ＴとＹを具体的にあてはめ、「日本」と「ドイツ」のバランスを示したものが図２である。ＴもＹもAとDを結ぶ対角線上の真中付近にいるので、「国際児としてのアイデンティティ」を形成する可能性は高いが、ＴはD寄りにいるので、「日本」が優位であり、ＹはA寄りにいるので、「ドイツ」が優位であることがわかる。どちらかの文化が優位であることが、（文化的）アイデンティティの形成にどのような意味をもつかは明確ではないが、将来の定住地の選択には影響を与えることも予想される。

図２：日独国際児文化的アイデンティティ：ＴとＹの事例



次に、日系国際児の（文化的）アイデンティティ形成についていくつかの点から考察する。

①両事例とも、母親がドイツ人である。どちらの母親も専業主婦であり、父親に比べ、子どもと過ごす時間が長いことから、ドイツ人の母親の影響力が大きいことが推察される。Ｔの母親は、日本語が堪能であり、日本的な生活をしている。それに対して、Ｙの母親は日本語は得意でなく、ドイツ語を頻繁に使用し、ドイツを志向していた。母親の言語・文化（国）に対する態度、およびそのような母親によって作られる家族の雰囲気は、暗黙のうちに、子どもに影響を及ぼし、Ｔは日本が優位に、Ｙはドイツが優位になったと考えられる（特に、Ｙは母親の影響力が強いことに言及している）。つまり、外国人の母親のもう一つの言語・文化（母語・母文化以外の言語・文化）に対する態度は子どもの文化的アイデンティティ形成に重要な意味をもつと言えるだろう。

②両事例が在籍している国際学校には、日系国際児だけではなく、ドイツ人やドイツ語圏出身者、日本人の子どもなども在籍しており、日本とドイツを混合したような独特な文化が存在している。すなわち、純粋なドイツでも純粋な日本でもないような空間である。そこでのドイツ文化は実際（ドイツ本国）のドイツ文化とは異なるし、日本文化も、実際（学校の外）の日本文化とは異なるが、そこでは、国際児は自然に受け入れられて生活している。しかしながら、それは、国際児にとっては、現実の文化に触れるまでの「文化的モラトリアム」（文化的アイデンティティのモラトリアム）と言えるような状況である。そのなかで、国際児たちは、両文化（言語）に対するさまざまな試みを繰り返すことによって、将来の選択に備えることが可能である。また、他の国際児に出会える国際学校は、「国際児としてのアイデンティティ」を形成する上で重要な意味をもつと考えられる（例：「緩衝装置」[5]としての役割）。

③両事例ともに、小さなころ（幼児期）から、二言語・二文化環境が存在しているが（ドイツ語やドイツ文化については、国際学校が、日本語・日本文化については、近所の友達や家庭での補習）、そのような環境が、「国際児としてのアイデンティティ」形成に不可欠である二言語・二文化の知識の習得を可能にしたと考えられる。

まとめと今後の課題

本研究では、国際学校に在籍し、父親が日本人で母親がドイツ人である、類似した属性（条件）をもつ二人の日系国際児（女子青年）の事例をとりあげ、文化的アイデンティティ形成について検討した。その結果、両事例とも、「国際児としてのアイデンティティ」を形成していくことが予想されたが、二文化のバランスには違いが見られた。さらに、①外国人の母親の母語・母文化以外の言語・文化に対する態度、②「文化的モラトリアム」（文化的アイデンティティのモラトリアム）を提供する

国際学校、および③幼児期からの二言語・二文化環境が国際児の文化的アイデンティティ形成に重要であることが指摘された。また、このような事例の詳細な比較検討が文化的アイデンティティ形成の解明に有効であることが示唆された。今後、さまざまな事例をとりあげることによって、国際児の文化的アイデンティティ形成について包括的に検討していくことが望まれる。

＜注＞

１）本稿における「国際児」とは、「国籍と民族が異なる男女の間に生まれた子ども」（鈴木、2004a）である。しかしながら、「国際児」をより広義にとらえる立場もある。

２）３）厚生労働省大臣官房統計情報部　人口動態統計

４） 1985年の国籍法の改正によって、両親のどちらかが日本人の場合には子どもは日本国籍を所有することができるようになった。本稿の２事例は、それ以前に出生している。

５） 江淵（1980）は、日本人コミュニティの機能のひとつを「カルチュア・ショック緩衝装置」と呼んだ。

＜引用文献＞

江淵一公（1980）東南アジアの日本人―現地文化への適応パターンの問題を中心として現代のエスプリ　別冊　祖父江孝明編　日本人の構造、151-173

Murphy-Shigematsu, S. (1997) “American-Japanese ethnic identities: Individual assertions and social refrections. Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism, vol. 3, No. 1, 23-37.

マーフィー・重松、スティーヴン（坂井純子訳）（2002）『アメラジアンの子供たち：知られざるマイノリティの問題』（集英社新書）、東京：集英社

新田文輝（1992）国際結婚のこどもたち　東京：明石書店

野入直美（2000）沖縄のアメラジアン　山本雅代編著　日本のバイリンガル教育　東京：明石書店、pp.213 - 252

鈴木一代（1996）日本－インドネシア国際児の日本語習得と言語・文化的環境についての一考察　東和大学紀要第22号、127-139

鈴木一代（2004a）「国際児」の文化的アイデンティティ形成：インドネシアの日系国際児の事例を中心に　異文化間教育19、42-53

鈴木一代（2004b）国際児の文化的アイデンティティ形成をめぐる研究の課題　埼玉学園大学紀要人間学部編第４号、15-24。

鈴木一代・藤原喜悦、1994、国際家族の子どもの教育についての考え方、東和大学紀要第20号、183～194

鈴木一代・片寄美恵子、1997、国際家族の生活・適応状態と子どもの精神発達に関する研究：インドネシア- 日本国際家族の場合について研究助成論文集通巻第33号（安田生命社会事業団）、151～159

高橋順子（2002）多文化社会における「国際児」の研究　聖徳大学大学院児童学研究科修士論文（未刊行）

＜補足＞

本稿の一部は、2004年５月30日の異文化間教育学会第26回大会（明治学院大学）における、ケース・パネル「日系国際児の文化的アイデンティティ形成―事例の検討」のなかでの発表された。